

徳島県吉野川におけるイセウキヤガラの記録と生態ノート

藤井伸二*

Shinji Fujii: *Bolboschoenus planiculmis* (F. Schmidt) T. Koyama: A new locality recorded from Shikoku and its ecological notes

1995年10月24・25日に徳島県吉野川の名田橋付近左岸（藍住町徳命名田）および第十堰付近下流左岸（藍住町徳命祖母ヶ島）の干潟で植物調査を行った際、サンカクイによく似た繊細な抽水植物の大群落をみた。これらの群落はカモ類によって根茎部が掘り返されて食害を受けていたが、地下部の小さな塊茎がねらわれているようであった。この植物の形態に疑問を感じたので標本として持ち帰り、京都大学理学部植物学教室および大阪市立自然史博物館収蔵の標本をもとに検討した結果、イセウキヤガラ *Bolboschoenus planiculmis* (F. Schmidt) T. Koyama (*Scirpus iseensis* T. Koyama et T. Shimizu) であることが判明した。イセウキヤガラについては、コウキヤガラ（エゾウキヤガラ）*Bolboschoenus maritimus* (L.) Palla と別種であることが国内で認識されたのが比較的新しく、日本における分布や生態的知見も不十分なので、今回の調査で明らかになったことを報告したい。

イセウキヤガラは1967年に清水健美によって三重県桑名市揖斐川産のものに基づいて新種として記載された（このホロタイプは京都大学所蔵）。コウキヤガラとの区別点は清水（1967）、小山（1980）、角野（1994）による

と、花序が側生状となること、小穂の数が1～数個と少ないこと、葉の断面は三角形、全体に繊細で小形などの点で簡単に区別できる（コウキヤガラでは花序が頂生し、小穂数はより多く、葉の断面は二つ折り、全体にやや大きい）。しかしながら、本種を取り上げた市販の図鑑が最近までなかったために充分認識されることなく今日に至ったようである。

日本における分布は、全国の主要標本庫を検討した角野（1994）によると本州と九州に点々と記録されているが、四国の分布はあげられていない。徳島県博物館植物標本目録（1987）、山中二男（1978）にも本種の名前はなく、本報告が四国ではじめての記録と思われる。今回の調査において標本を収集し、確実な同定を行ったのは吉野川名田橋付近左岸の群落のものであるが、生態的特性（後述）から判断して、第十堰から下流に広く分布する類似植物は全てイセウキヤガラと推定される。このことが事実なら、吉野川下流域ではヨシについて大規模な群落を形成していることになり、これまでコウキヤガラと混同されて見過ごされてきた可能性が高い。なお、本種の学名には現在 *Bolboschoenus planiculmis* (F. Schmidt) T. Koyama が当てられているが、これに

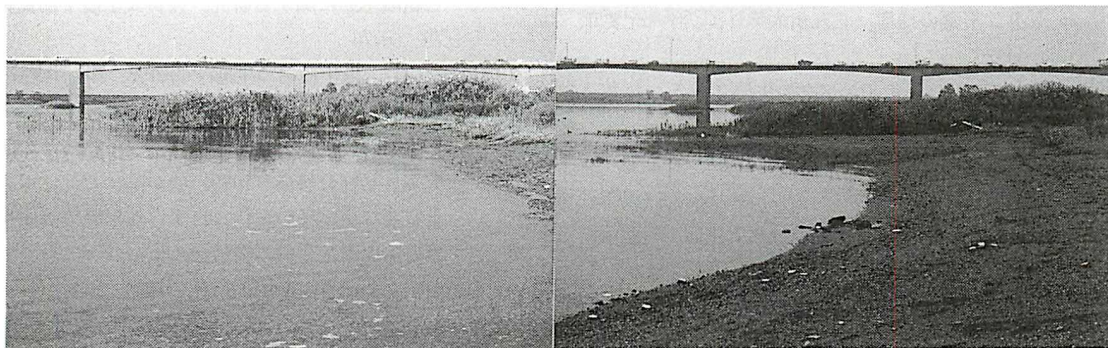


図1 イセウキヤガラ群落（吉野川名田橋付近、1995年10月24日）。左が水没状態で右は潮がひいて群落が現れた状態。

*大阪市立自然史博物館

については小山(1980)が詳述しているので参照されたい。

本種の生態、とくに生育環境については清水(1967)に詳しく、それによるとシオクグ帯より深い所を好み、満潮時には完全に水没するような場所に生育し、シオクグ帯で浅に生育するコウキヤガラと異なることが指摘されている。この理由について清水(1967)は両種の耐塩性の差であると考察している。吉野川においても、イセウキヤガラの生育環境は満潮時に完全に水没する砂質あるいは泥質の干潟で、ヨシ帯の前列に帯状の群落を形成していた。観察時は引潮時で、水没していた群落が見る間に干潟とともに現れてきた(図1)。ヨシと混生することはほとんどなく、イセウキヤガラをみの純群落を形成している。

名田橋付近の本種の群落の地下部を掘り返すと、地下茎先端に直径6~7mmの小さな塊茎をつけていた。上部の植物体は黄変して枯死寸前だったが、塊茎は中身が充実していることから、これによって冬を越すと考えられる。小山(1980)は本種の小さな塊茎をみておそらく1年生であろうと推定しているが、清水(1967)は3年間にわたって本種を継続栽培していることから、多年生であることがうかがえる。今回の調査で得た知見も本種が多年生であることを支持している。もちろん、現地での継続的な調査による裏付けが今後必要である。

今回、私が採集した標本および標本庫に収められている標本の地下器官を検討した結果、コウキヤガラの塊茎は最大径3cmにもなるが、イセウキヤガラのそれは最大でも1cmを越えることはない。また、コウキヤガラの塊茎には前年あるいはそれ以前の茎の跡がときに見られるが、イセウキヤガラではそのようなものを全く認めることができなかった。これらの事実から、イセウキヤガラは多年生ではあるが、コウキヤガラのように同一の塊茎が数年にわたって維持されることはなく、毎年塊茎を新しく更新していると考えられる。それゆえ、小さな目立たない塊茎しか形成しないと推測される。このような地下器官の動態は両植物の生態的特性の差異を解明するにあたって注目すべき点と思われる。

吉野川で観察したイセウキヤガラ群落はカモによる食害をひどく受けており、生育地の干潟が現われるとカモによって掘り返されたらしい穴が累々と見られた。群落の水没時の観察では、マガモを主体とした20羽ほどの群れが逆立ち採餌でイセウキヤガラ群落の河底をあさっており、その場所で潮が退いた後に撮影したのが図2であ



図2 掘り返された砂質土壌上のイセウキヤガラ群落(図1の近景, 1995年10月24日)。



図3 穴ぼこが累々と続く泥質土壌上の群落。これらの植物もイセウキヤガラと思われる(吉野川第十堰下流付近, 1995年10月25日)。

る。同様の状態は第十堰下流付近の泥質干潟でも観察された(図3)。川岸には食害によって食いぢぎられたと思われるイセウキヤガラの茎葉が漂着していた。吉野川に分布する大規模なイセウキヤガラとおもわれる群落は、カモ類の重要な餌資源になっている可能性の高いこともあわせて指摘しておきたい。

最後に、現地を案内していただいた木下覚氏と調査に協力していただいた栗林実氏にお礼申し上げる。また、本稿をまとめるにあたり、角野康郎氏と和田岳氏からは有益な助言をいただいた。記して感謝する。

標本記録: S. Fujii 4733 24-x-1995, 徳島県板野郡藍住町徳命名田 吉野川左岸名田橋。

引用文献

角野康郎. 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版, 東京.

小山鐵夫. 1980. 日本のウキヤガラ属. 植物分類地理
31: 139-148.

Shimizu, T. 1967. An observation on *Scirpus
iseensis*, sp. nov. Journal of Japanese
Botany 42 (6): 175-181.

徳島県博物館編. 1987. 徳島県博物館所蔵資料目録第16
号植物標本目録—顕花植物・シダ植物編. 徳島
県博物館, 徳島.

山中二男. 1978. 高知の植生と植物相. 林野弘済会高知
支部, 高知.

○鷺谷いづみ・矢原徹一『保全生態学入門—遺伝子から
景観まで』(文—総合出版, 1996年3月, 270p, 3,090
円)

種の絶滅危惧問題に代表される生物多様性の危機が広
く認識されるようになる中で, 保全生物学の重要性が高
まっている. それに呼応して欧米では保全生物学の教科
書が, 次々と出版され, 関連するタイトルも含めれば数
十冊は下らない状況である. しかし, 日本には, 今まで
教科書がなかった. それだけに本書は待望の出版といえ
る.

本書は, 単に環境や種の危機的状況を紹介して保全の
必要性を訴えるだけにとどまっていない. 「生物多様性
の保全」という明確な実際的目標を持ちながら, むしろ,
その基礎となる生物界の成り立ちを学問的に, 筆者等の
言葉によると「適応進化」と「生物間相互作用」の視点
を基本にして, まさに遺伝子から景観にいたる生物多様
性のさまざまな階層について概説している. しかし, 教
科書にありがちな知識の羅列や無味乾燥な記述はどこに
もない. 筆者等の明確な考えに裏付けられ, 問題の背景
から今後の方向までが興味深く説き進められる. 保全生
物学にける筆者等の熱い思いが伝わってくる好著であ
る. 保全を考える者の座右の書のひとつと言えよう.

内容は次のとおり.

1. 保全生態学とは何か
2. 生物多様性とその危機
3. 種の機能とその指標性
4. 生物多様性の進化的根拠
5. 生物多様性の生態的根拠
6. 種内の遺伝的変異とメタ個体群の動態
7. 生物多様性を脅かす景観の変容
8. 生物多様性の管理・回復

(角野康郎)

○保全生態学研究会

保全生態学の発展とわが国における生物多様性の保全
そのものに寄与することをめざして学術・情報普及活動
を行なうことを目的に, 標記の研究会が発足しました.
保全の問題に関心のある方ならばどなたでも参加できま
す. 研究会は「保全生態学研究」(年2~3回発行予定)
とともに「保全生態だれが誰: 保全に役立つ情報付きの
名簿」を定期的に刊行します.

会費 個人会員 5,500円 (学生 3,000円)

入会申込, お問い合わせは

〒305 つくば市天王台1-1-1

筑波大学生物科学系 鷺谷いづみ研究室内

保全生態学研究会事務局

e-mail junjun@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

TEL 0298-53-4531 (荒木, 西廣, 松村)

FAX 0298-53-6614 (鷺谷いづみ宛)